

# 福祉施設および精神病院における園芸活動の効果，導入と スタッフの意識に関する考察

神田啓臣<sup>1</sup>・高橋春實<sup>1</sup>・吉田康德<sup>1</sup>・久能幹雄<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 秋田県立大学生物資源科学部

<sup>2</sup> 社会福祉法人 敬仁会

e-mail: kanda@akita-pu.ac.jp

## Relation Between the Mind-Set of Staff Engaged in Horticultural Activities at Welfare and Other Facilities and Effects and Introduction of the Activities

Hiro-omi KANDA<sup>1</sup>, Harumi TAKAHASHI<sup>1</sup>, Yasunori YOSHIDA<sup>1</sup> and Mikio KUNOH<sup>2</sup>

<sup>1</sup> Akita Prefectural University

<sup>2</sup> Social Welfare Corporation "Keijinkai"

### Summary

To clarify the relation between the mind-set of staff engaged in horticultural activities at welfare and other facilities and the effects and introduction of activities, we comprehensively analyzed the results of questionnaire surveys previously conducted at facilities throughout Akita Prefecture. In addition, we also considered actual cases of the introduction of such activities at a facility.

1. The following results were obtained from the questionnaire surveys. The levels of effects produced by horticultural activities did not differ by type of facility, although the nature of operations involved in the activities (type of operations, location of operations, kinds of crops, etc.) did. However, the levels of effects differed according to the occupation of staff providing guidance, or their presence or absence, and mind-set regarding horticultural therapy. Thus, not only the nature of operations but also the attitude of staff toward the activity are important in enhancing the effectiveness of horticultural activities.

2. Actual cases involving the introduction of such activities revealed the following considerations. Staff may have obtained favorable reactions from clients through horticultural activities in which staff and clients performed operations together and when staff brought clients near the cultivated plants. These may have contributed to the

smooth introduction of horticultural activities to the welfare facilities.

**Keywords :** horticultural activities, mind-set of staff, questionnaire survey, welfare facilities  
園芸活動，スタッフの意識，アンケート調査，福祉施設

### 緒 言

以前，園芸療法への関心の高まりを背景に，全国の各都道府県において福祉施設等を対象とした園芸活動に関するアンケート調査が行われた（松尾，2002）。それらの調査結果により，福祉施設等での園芸活動の実態や問題点が明らかにされたが，園芸活動を効果的なものとする要因にはどのようなものがあるのかについての明確な知見は得られなかった。

それらの調査と同時期に，著者らは秋田県内の福祉施設等を対象にアンケート調査を行い，園芸療法に対する意識（神田ら，2001a）および園芸活動の実態や効

果・問題点の有無（神田ら，2001b）について明らかにした。しかし，この調査においても，園芸活動の効果の要因について明確な知見を得ることはできなかった。

これらの調査が行われてから10年ほどが経過した。この間の園芸活動の効果に関する研究例をみると，作業の種類と効果の関係（Kandaら，2008；大竹ら，2010），いくつかの症例とその効果（若野ら，2011）や園芸活動プログラムの開発とその効果（増谷・太田，2013）など，活動内容が効果に与える影響についての報告が多い。一方，著者らは福祉施設での園芸活動実践を通じて，活動の効果の要因には活動内容だけではなく，スタッフとして活動に携わる人達の意識のあり方も含まれているのではないかと考えている。半澤・

2014年3月8日受付。2014年5月12日受理。

Table 1. Contents of the questionnaire applied to this analysis.  
第1表. 検討対象としたアンケート調査の設問内容.

質問事項(質問文)	回答(得点)
園芸療法に対する意識について	
Q1 園芸療法についての知識・情報の多さ(園芸療法という言葉について自分ではどのくらい知っていると思うか?)	聞いたことがない(0) — 聞いたことはあるが全く知らない(1) — 聞いたことはあるがあまり知らない(2) — まあまあ知っている(3) — よく知っている(4)
Q2 園芸療法への興味の高さ(園芸療法に興味はあるか?)	全く興味はない(0) — あまり興味はない(1) — どちらともいえない(2) — まあまあ興味がある(3) — とても興味がある(4)
Q3 園芸療法を必要と感じる程度(園芸療法は必要だと思うか?)	全く必要ない(0) — あまり必要ない(1) — どちらともいえない(2) — まあまあ必要だ(3) — とても必要だ(4)
Q4 園芸療法のイメージの幅広さ(園芸療法をどのようなものとするか?)	下のカテゴリ①~⑩の中から、園芸療法だと思うものを全て選んでもらい、選んだカテゴリの数を得点とした。例えば、①、②、④を選択した場合は3点。 ①治療・リハビリとして園芸を利用、②身体機能の低下を防ぐため園芸を利用、③植物の香りや触感で五感に刺激を与える、④生きがい・楽しみ作りのため園芸を利用、⑤気分転換・ストレス解消に園芸を利用、⑥仲間作りのため園芸を利用、⑦技能訓練として園芸を行う、⑧市民農園など、⑨学校農園(教育に園芸を利用)、⑩花いっぱい運動などの都市緑化活動
Q5 自分達の活動の位置づけ(自分達がやっている活動は園芸療法だと思うか?)	園芸療法だとは思わない(0) — わからない(1) — 園芸療法だと思うが、そのように位置付けていない(2) — 園芸療法だと思うし、そう位置付けている(3)
園芸活動の内容について	
q1 活動人数(活動人数は?)	作業人数を得点とした。ただし25人以上の施設は全て25点とした。
q2 活動者の男女比(活動者のうち男性の占める割合は?)	女性のみ(0) — 女性の占める割合が多い(1) — どちらともいえない(2) — 男性の占める割合が多い(3) — 男性のみ(4)
q3 活動時期(活動を1年間のうちいつ行っているか?)	夏(5~9月)のみ行っている(0) — 夏に行い、さらに春・秋・冬のいずれか一つの季節にも行っている(1) — 夏に行い、さらに春・秋・冬のいずれか二つの季節にも行っている(2) — 通年で行っている(3)
q4 一般的な作業(どんな作業を行っているか?) <sup>z</sup>	下のカテゴリ①~⑤のうち、行っている作業を全て選んでもらい、選んだカテゴリの数を得点とした。例えば、水やりと除草を行っている場合は2点となる。 ①水やり、②除草、③播種、④育苗・移植、⑤収穫
q5 特殊な作業(どんな作業を行っているか?) <sup>z</sup>	下のカテゴリ⑥~⑬のうち、行っている作業を全て選んでもらい、選んだカテゴリの数を得点とした。 ⑥土作り・堆肥作り、⑦耕起・畝立て、⑧施肥・追肥、⑨薬散、⑩⑥~⑨以外の管理作業、⑪加工・販売、⑫後片付け、⑬その他
q6 露地園芸的な活動(栽培の場所は?) <sup>y</sup>	花壇も畑も使っていない(0) — 花壇か畑のどちらかを使っている(1) — 花壇も畑も両方使っている(2)
q7 施設園芸的な活動(栽培の場所は?) <sup>y</sup>	温室も屋内(ベランダ含む)も使っていない(0) — 温室か屋内のどちらかを使っている(1) — 温室も屋内も使っている(2)
q8 一般的な作物の栽培(何を栽培しているか?) <sup>x</sup>	花も野菜も栽培してない(0) — 花か野菜のどちらかを栽培している(1) — 花も野菜も栽培している(2)
q9 特殊な作物の栽培(何を栽培しているか?) <sup>x</sup>	花・野菜以外は栽培してない(0) — 「ハーブ」「観葉植物」「果樹」「その他」のいずれか一つを栽培する(1) — いずれか二つを栽培する(2) — いずれか三つを栽培する(3) — いずれも栽培している(4)
Qk 園芸活動の効果の程度(園芸活動を行って効果はみられたか?)	全くみられない(0) — あまりみられない(1) — どちらともいえない(2) — まあまあみられた(3) — かなりみられた(4)

<sup>z</sup>: q4とq5はアンケートでは同一の質問である。特に回答の多かった①~⑤を一般的な作業とみなした。

<sup>y</sup>: q6とq7はアンケートでは同一の質問である。特に回答の多かった花壇と畑を露地園芸的な活動場所とみなした。

<sup>x</sup>: q8とq9はアンケートでは同一の質問である。特に回答の多かった花と野菜を一般的な作物とみなした。

岩崎(2013)も高齢者施設での園芸活動の効果と職員の意識との関連を指摘している。しかし、この指摘と著者らの経験はいずれも一施設での事例であり、福祉施設での園芸活動全般にあてはまるかどうかについて

は、検討例は見当たらない。

ところで、ある組織や団体等で園芸活動を始めるにあたっては、課題となることがいくつか考えられる。例えば、福祉施設では活動の場所、指導者、資金の確

保等（大竹ら，2008）が，小学校では活動時間の確保等（入江・岡島，2012）が課題となっている。また，多田（2010）は園芸療法実施上の課題としてハード面，ソフト面，資金面の3要素を指摘している。一方，著者らは，上記の他にスタッフの意識を考慮することも必要なのではないかと考えている。一例をあげると，著者らは，老人クラブ会員に福祉施設での園芸活動のスタッフとなってもらい取り組みを行っている（神田ら，2009）が，取り組み開始当初は老人クラブ会員に要介護者の介助に対する苦手意識がみられた。そこで著者らは，苦手意識を薄めるための工夫を試みた結果，次年以降の円滑な継続につなげることができた。この事例からは，園芸活動の導入においてはスタッフの意識を考慮することの必要性が示唆されるが，福祉施設へ園芸活動を導入する場合に関しては，そのような事例研究は見当たらない。

そこで本報では，以前，著者らが行ってきたアンケート調査結果を総合的に分析するとともに，われわれが福祉施設において主宰した園芸活動事例を考察することにより，園芸活動に携わるスタッフの意識と園芸活動の効果および活動の円滑な導入との関係について検討した。

## 方 法

### 1. 秋田県内の福祉施設および精神病院を対象としたアンケート調査

調査対象や調査方法については，既報（神田ら，2001a,b）で述べた通りである。すなわち，2000年8月に秋田県内の252施設（老人福祉施設175件，知的障害者施設39件，身体障害者施設14件，精神病院24件）へアンケート用紙を郵送し，各施設で園芸活動を担当している職員に回答を依頼した。質問項目については，既報（神田ら，2001a）に記載したので，その詳細は省略した。本報では，それらの質問のうち，施設種類の区別（老人福祉施設，身体障害者施設，知的障害者施設，精神病院の区別），園芸活動の実施の有無，活動の指導者の区別（指導者の有無および指導者の職種），および第1表に記した15項目（園芸療法に対する意識について：Q1～Q5，園芸活動の内容について：q1～q9，園芸活動の効果の程度について：Qk）を検討対象とした。なお，Qkについては園芸活動に効果がみられたかどうかを回答者に判断してもらった。集計にあたっては，数値評価を行うために，第1表に示したように各質問ごとに回答を得点化した。

### 2. 老人福祉施設への園芸活動の導入と職員の意識に関する調査

秋田県南秋田郡にある老人福祉施設（以下，本施設と略）では，著者らが主体となって2002年度に園芸活動を導入した。具体的には以下に示す(1)～(4)の活

動を行った。なお本施設では，2001年度以前は施設設備担当職員が菜園をつくることはあったが，園芸活動といえることは行っていなかった。また2003年度からは月1回程度のペースで園芸作業のイベントを継続しているので，活動の導入が円滑にすすんだ事例であるとみなした。

(1) トマトのプランター栽培：秋田県立大学短期大学部附属農場（以下農場）で播種・育苗し，プランターへ定植した。本施設は利用者の居住スペースが4ユニットからなっているので，プランターを各ユニットの菜園に設置した。栽培管理については，設置時に各ユニットの介護職員に日常の水やりを依頼したが，実際には施設設備担当職員がほとんどの管理を行った。設置期間は2002年4月から10月までとし，利用者に自由に鑑賞や収穫をしてもらった。なお，収穫開始直前となる6月中旬に各ユニット別に介護職員へアンケート調査に回答してもらった。質問事項は，①職員は毎日水やりを行っているか，②利用者は水やりを行っているか，③利用者の中にプランタートマトに関心を持つ人はいるか，④プランタートマトを設置してから利用者に変化がみられたか，である。

(2) パンジーの鉢栽培：農場で播種・育苗した苗を，2002年9月に本施設のイベントとして利用者に鉢上げ作業してもらい，介護職員が作業を手伝った。10月から翌年3月まで本施設の屋内に設置し，利用者に自由に鑑賞してもらった。なお，鉢上げ作業直後に，イベントに参加した介護職員8名にアンケート調査に回答してもらった。質問事項は，①利用者の様子（作業内容は理解していたか，意欲・集中力はみられたか，感情はみられたか，作業はできたか，会話・協調性はみられたか），②職員自身の感想（今回の鉢上げ作業はどうだったか，今後もこのような活動を行いたいかなど），である。

(3) シクラメンの販売：2002年12月に農場で栽培したシクラメン（5号鉢）を1鉢400円で本施設的全職員を対象に注文販売した。

(4) 園芸活動の講習会：2003年2月に筆頭著者が本施設的全職員によびかけて講習会を30分間ほど開催した。内容は，園芸療法の紹介と本施設での1年間の園芸活動の結果報告を行った。

## 結 果

### 1. 秋田県内の福祉施設および精神病院を対象としたアンケート調査

#### 1) 園芸活動実施の有無および活動の指導者

第2表に示した通り，全送付252施設のうち75%にあたる191施設より回答を得，このうち127施設で園芸活動を実施していた（実施率68%）。園芸活動の指導者としては，介護職員が最も多く，ついで指導員，

Table 2. Numbers of the facilities answering to the questionnaire surveys and carrying out horticultural activities.  
第2表. 各種福祉施設および精神病院におけるアンケートの回答数, 利用者が園芸活動を行っている施設数.

施設種類	送付数	回答数 (回収率 <sup>z</sup> )	園芸活動を行っている施設数 (実施率 <sup>y</sup> )
老人福祉施設	175	130 (74% <sup>x</sup> )	77 (61%)
知的障害者施設	39	30 (77%)	28 (93%)
身体障害者施設	14	10 (71%)	6 (60%)
精神病院	24	19 (79%)	14 (74%)
不明	-	2	2
合計	252	191 (75%)	127 (68%)

<sup>z</sup> 送付数に対する回収数の百分率.

<sup>y</sup> 質問「貴施設では利用者が園芸活動を行っているか」の有効回答に対する百分率.

<sup>x</sup> パーセンテージは小数点第1位を四捨五入した.

看護職員, 指導者なし, 作業療法士 (以下, OT と略記)・理学療法士 (以下, PT と略記), 部外者の順であった (第3表)。なお, 施設の種類と指導者の職種との関係を見ると, 老人福祉施設では介護職員が, 障害者施設 (身体障害者施設および知的障害者施設) では指導員が, また精神病院では看護職員およびOT・PTの割合がそれぞれ高かった。

Table 3. Type of the occupation of staff providing guidance for horticultural activities.  
第3表. 各種福祉施設および精神病院における園芸活動の指導者の種類.

施設種類	職員					部外者	なし
	介護職員	指導員	看護職員	OT・PT <sup>z</sup> 職員	その他		
老人福祉施設	38	4	13	13	23	14	18
知的障害者施設	1	20	-	-	7	1	1
身体障害者施設	1	2	-	1	-	-	3
精神病院	1	-	9	7	2	-	-
不明	2	-	-	-	-	-	-
合計	43	26	22	21	32	15	22

<sup>z</sup> OT: 作業療法士, PT: 理学療法士.

## 2) 園芸療法に対する意識, 園芸活動の内容および活動の効果の程度について施設種類別のクロス集計

松尾ら (1997a,b) は, 福岡県内の福祉施設等を対象とした調査において, 老人福祉施設とそれ以外の施設との間で回答結果に違いがみられると報告している。

そこで著者らの調査結果について, 施設の種類によって園芸療法に対する意識 (以下, 意識), 園芸活動の内容 (以下, 活動内容) および活動の効果の程度 (以下, 効果) に違いがみられるのかどうかを検討した。すなわち, 調査施設を老人福祉施設, 障害者施設および精神病院の3群に分け, 各質問の得点の平均値を比較した (第4表)。その結果, 意識に関しては, Q1~Q5のすべてにおいて精神病院が最も高かったが, 他施設との間に有意差がみられた質問項目はQ5のみであり, 他の4項目については有意差はなかった。一方, 活動内容に関しては, 9項目中5項目 (q2, 3, 5, 6, 7) において施設の種類による有意差が認められた。また, 効果については, 意識に関する結果と同様, 精神病院が高かったが, 他施設との間に有意差はなかった。

Table 4. Comparison of answers to the questionnaire surveys of each type of welfare facility.  
第4表. 老人福祉施設, 障害者施設および精神病院における回答の比較<sup>z</sup>.

質問事項 <sup>y</sup>	各種施設における回答の得点			
		老人福祉施設	障害者施設	精神病院
園芸療法に対する意識について	Q1	1.88 a <sup>x</sup>	1.85 a	2.00 a
	Q2	2.84 a	2.88 a	3.14 a
	Q3	2.96 a	2.94 a	3.25 a
	Q4	4.13 a	4.56 a	5.07 a
	Q5	1.31 a	1.21 a	2.00 b
園芸活動の内容について	q1	11.5 a	15.2 a	11.1 a
	q2	1.05 a	2.24 b	2.50 b
	q3	1.26 a	1.85 b	1.93 b
	q4	2.45 a	2.94 a	3.07 a
	q5	0.40 a	1.00 b	1.57 c
	q6	0.86 a	1.24 b	1.00 ab
	q7	0.07 a	0.32 b	0.23 ab
	q8	1.60 a	1.36 a	1.57 a
	q9	0.27 a	0.39 a	0.43 a
Qk 園芸活動の効果の程度	2.57 a	2.67 a	2.93 a	

<sup>z</sup> 回答対象は, 老人福祉施設77件, 障害者施設34件 (知的障害者施設と身障害者施設を合わせた), 精神病院14件.

<sup>y</sup> Q1~Q5, q1~q9, Qkは第1表と同じ.

<sup>x</sup> 数値は平均値, 異なるアルファベット文字間には, Duncan法による多重検定 (5%水準) で有意差あり.

## 3) 園芸療法に対する意識, 園芸活動の内容および活動の効果の程度について指導者の職種別のクロス集計

前項では施設種類別に回答を比較した場合, 精神病院は, 意識と効果に関しては, 他の施設に比較して有意差は1項目でしかみられないものの, 全般的に高くなる傾向のあることがわかった。この理由としては, 精神病院には園芸活動の指導者として看護職員, OT・PTが多い (第3表) ためではないかと推察される。そこで, 調査施設を看護・OT・PT (指導者の中に看護職員またはOT・PTが含まれている施設), そ

の他職員（指導者の中に看護職員・OT・PTは含まれず、それ以外の職員が指導している施設）および部外者・なし（指導者の中に職員が含まれず、外部者が指導しているか、もしくは指導者がいない施設）の3群に分け、各質問の得点の平均値を比較した（第5表）。その結果、意識および効果に関する得点は、6質問項目すべてにおいて高い順から「看護・OT・PT」、「その他職員」、「部外者・なし」となり、「看護・OT・PT」と「部外者・なし」との間には有意差が認められた。

Table 5. Comparison of answers to the questionnaire surveys of each type of the occupation of staff providing guidance for horticultural activities.  
第5表. 園芸活動指導者の職種別にみた回答の比較.

質問事項 <sup>z</sup>	各職種における回答の得点			
	看護・OT・PT <sup>y</sup>	その他職員 <sup>x</sup>	部外者・なし <sup>w</sup>	
園芸療法に対する意識について	Q1	2.33 a <sup>v</sup>	1.87 a	1.20 b
	Q2	3.19 a	2.84 ab	2.53 b
	Q3	3.23 a	2.91 ab	2.68 b
	Q4	4.92 a	4.20 ab	3.90 b
	Q5	1.59 a	1.33 ab	0.95 b
園芸活動の内容について	q1	15.9 a	13.1 a	6.0 b
	q2	1.81 a	1.63 a	1.40 a
	q3	1.59 a	1.50 a	1.37 a
	q4	3.19 a	2.65 a	1.55 b
	q5	0.83 a	0.67 a	0.40 a
	q6	0.89 ab	1.04 a	0.75 b
	q7	0.17 a	0.18 a	0.10 a
	q8	1.59 a	1.50 a	1.50 a
	q9	0.41 a	0.20 a	0.25 a
Qk 園芸活動の効果の程度	2.84 a	2.55 ab	2.50 b	

<sup>z</sup> Q1~Q5, q1~q9, Qkは第1表と同じ。

<sup>y</sup> 園芸活動の指導者に、看護職員・OT(作業療法士)・PT(理学療法士)が含まれている(対象37件)。

<sup>x</sup> 園芸活動の指導者に、看護職員・OT・PTは含まれていないが、それ以外の職員が含まれている(対象55件)。

<sup>w</sup> 園芸活動の指導者に、職員は含まれず、外部の者が指導しているか、もしくは指導者がいない(対象20件)。

<sup>v</sup> 数値は平均値。異なるアルファベット文字間には、Duncan法による多重検定(5%水準)で有意差あり。

## 2. 老人福祉施設への園芸活動の導入と職員の意識に関する調査

まず、本施設内での栽培と利用者の関与を伴う活動である(1)と(2)について述べる。(1)で実施したアンケートの結果をみると、職員には毎日の水やりを依頼していたが、依頼通りに行っていたユニットはなかった(第6表)。それとは対照的に、利用者の関心や変化はすべてのユニットがあったと回答していた。(2)のアンケートでは、利用者の様子については、意欲・集中力、作業内容の理解、感情といった精神面への評価が高く、作業面(作業はできたか)の評価は精神面

Table 6. Answer to the questionnaire surveys for activity of tomato cultivation using planters to staff at a welfare facility.  
第6表. 老人福祉施設で行った園芸活動「トマトのプランター栽培」に関する職員へのアンケートの結果.

質問事項	回答数 <sup>z</sup>		コメント等
	はい	いいえ	
職員は毎日水やりしているか	0	4	不定期に行っている(2件)
利用者は水やりしているか	3	1	全員はできない(1件)
利用者の中にプランタートマトに関心を持つ人はいるか	4	0	数人(1件)、ユニットの約半数(1件)、男女同数(1件)、女性が多い(1件)
プランタートマトの設置以降利用者に変化がみられたか	4	0	楽しみになっている(3件)、時々トマトや畑を見るようになった(3件)、気分転換になっている(2件)、会話がはずむ(1件)、昨年を思い出している(1件)

<sup>z</sup> 本施設には利用者の居住スペースが4ユニットあるので、各ユニットごとに回答してもらった。

に比べて低めに評価された(第7表)。なお、データには示していないが、筆頭著者の観察でも、今回の鉢上げは利用者には難度の高い作業のようだった。職員自身の感想については、今回の鉢上げ作業をとて高く評価しており、その理由としては、「楽しそうに作業していた」「成長が楽しみ」「笑顔が多かった」という利用者の精神面の反応の良さを指摘していたものが多かった(第8表)。また、「今後もこのような活動を行いたい」との質問も肯定的な回答が非常に多かった。

Table 7. Answer to the questionnaire surveys for potting activity of pansy to staff at a welfare facility.  
第7表. 老人福祉施設で行った園芸活動「パンジーの鉢上げ」に関する職員へのアンケートの結果.

質問事項	得点ごとの回答数 <sup>z</sup>					平均得点	
	1	2	3	4	5		
利用者の様子	作業内容は理解していたか	0	0	0	4	4	4.5
	意欲・集中力はみられたか	0	0	0	3	5	4.6
	感情はみられたか	0	0	0	4	4	4.5
	作業はできたか	0	1	1	4	2	3.9
職員の感想	会話・協調性はみられたか	0	0	1	5	2	4.1
	今回の活動はどうだったか	0	0	0	1	7	4.9
	今後もこのような活動を行いたい	0	0	0	2	6	4.8

<sup>z</sup> 各質問事項に5段階で回答してもらい、肯定的な回答ほど得点が高くなるように、1~5の得点を与えた。

本施設内での栽培も利用者の関与も伴わない活動である(3)と(4)については、(3)ではシクラメンを購入したのは全職員30人中5人(事務職員と施設設備担当職員のみで介護職員はなし)であった。(4)では講習会に参加した者は30名中4名で、介護職員は17名中2名だった。

Table 8. The comments from staff for potting activity of pansy.  
 第8表. 園芸活動「パンジーの鉢上げ」に関する職員へのアンケートにおけるコメント<sup>2</sup>.

質問事項	コメント
今回の活動はどうだったか	コメント記入者数7人 内訳：楽しそうに活動していた（2件）、成長を楽しみにしていた（2件）、笑顔が多かった（2件）、協力していた（1件）、土に触れることができた（1件）。
今後もこのような活動を行いたい	コメント記入者数5人 内訳：成長が楽しみになる（2件）、土にふれる機会になる（2件）、余暇活動になる（1件）、良い刺激になる（1件）。

<sup>2</sup> 第7表の質問事項「職員の感想」の2項目それぞれに自由記入してもらった。

## 考 察

まず、秋田県内の福祉施設等を対象としたアンケート調査の結果について考察を行う。松尾ら（1997a,b）は福岡県内の福祉施設等を対象とした調査において、老人福祉施設とそれ以外の施設との間で回答結果に違いがみられると報告している。著者らの今回の調査結果でも、活動内容については施設の種類による違いが目立った。しかし、意識に関しては、施設種類の違いよりも指導者の職種や指導者の有無といった違いの方が大きく影響しており、活動の効果についても同様であった。また、著者らが、福祉施設等で園芸活動を担当している職員から聞き取りをしたところ、「職員が園芸に関心を持てば利用者を植物のあるところへ連れていくと思うのだが、現在は自分以外の職員の多くは関心を持っていないため、利用者の関心を園芸に向けられない（老人福祉施設）」、「入所者にとっては自分を担当している指導員が親代わりなので、指導員にほめられれば、入所者は一所懸命になることから、園芸活動を効果的にするには指導員が入所者の園芸活動に関心をよせることが必要だ（知的障害者施設）」といったコメントが寄せられた。

以上のことから、福祉施設等での園芸活動を効果的なものとするためには、活動内容だけではなく、職員がどのような意識を持って活動にあたるかということも重要な要因になるものと考えられる。なお本アンケートは、いずれの調査施設についても園芸活動の担当者へ回答してもらっているため、Qk（園芸活動の効果の程度）の回答についても回答者の主観に左右される可能性は排除できない。また、一般に園芸活動の効果には、精神面、身体面、コミュニケーション面などいくつかの種類があると考えられるが、今回はそれらと職員の意識との関係について検討しなかった。今後、効果の有無や程度、種類については、より客観的かつ詳細な検討を行うことが必要である。

次に、園芸活動の導入事例の結果について考察する。

福祉施設に園芸活動を導入するにあたっては、園芸活動担当職員だけではなく、より多くの職員（特に介護職員のような利用者と日常的に接する職員）が園芸や園芸活動に関心を持つことが必要なのではないかとの予想は、上述の秋田県内の福祉施設等対象のアンケート結果から当然得られることである。その一方で、園芸活動を実施している福祉施設において職員の園芸への関心が低いとする報告（柴谷ら, 2009）もみられる。本施設の場合はどうだったのであろうか。(1)では介護職員はトマトへの日常の水やりを行わず、また(3)では鉢花を全く購入しなかったことから、園芸への関心は小さいことがうかがわれた。そこで、(4)では園芸への関心を持ってもらうために施設内で講習会を開催したが、介護職員の参加は極めて少なかった。(3)と(4)の実施時期が、施設内での栽培と利用者の関与を伴う活動である(1)と(2)を約1年間行った後であることを考えると、本施設では(1)と(2)を通じて職員が園芸や園芸活動への関心を持つようになったので、園芸活動の導入が円滑にすすんだというわけではなかったと推察される。

それでは、円滑な導入の要因としてどのようなことが考えられるのだろうか。(1)の結果をみると、介護職員は、利用者がトマトに関心を持ったことや利用者に変化があったことを観察しており、(2)では精神面についての評価やコメントが多かったことから、介護職員は(1)と(2)ともに利用者の精神面の効果を感じとっていたことがうかがえる。また、(2)の鉢上げは難度の高い作業であり、利用者の作業面への評価が低かったにも関わらず、今後の継続希望は強かったことから、作業のしやすさよりも利用者の精神面の反応をより重視していたのではないかと考えられる。すなわち、本施設においては、利用者と一緒に栽培の様子を見たり、利用者と一緒に園芸作業を行ったりする機会を通じて、介護職員の多くが園芸に関心を持つようになったというよりも、むしろ「この活動は利用者の精神面の反応が良かったからまたやってほしい」と実感することが多くなり、このことが園芸活動の円滑な導入の一因になりえたのではないかと推察された。

以上の通り、職員の意識と園芸活動の導入との関係について考察してきたが、これは一施設での事例である。緒言で述べた老人クラブの例（神田ら, 2009）では、本事例とはまた違った考察とそれに基づく対応によって導入が行われた。すなわち、園芸活動のある組織・団体等に導入しようとする時には、活動の場所、時間、指導者、資金等の確保が当然課題となるが、これに加えて、構成メンバーの特徴と意識の把握、およびそれに基づく対応をとることも課題になると考えられることから、今後は、様々な組織・団体における事例検討をすすめていくことが必要と思われる。

## 摘 要

著者らが行った秋田県内の福祉施設等を対象としたアンケート調査結果を総合的に分析するとともに、著者らが福祉施設において主宰した園芸活動事例も含めて考察することにより、園芸活動に携わるスタッフの意識と園芸活動の効果および活動の円滑な導入との関係について検討した。(1) アンケート調査の結果、園芸活動の内容については施設の種類によって違いがみられた。しかし、園芸療法に対する意識や園芸活動の効果に関しては、施設の種類の違いよりも、むしろ指導者の職種や指導者の有無といった違いの方が大きく影響した。このことから、園芸活動を効果的なものとするためには、活動内容だけではなく、職員がどのような意識を持って活動にあたるかということも重要な要因になるものと考えられた。(2) 次に、著者らが主体となって福祉施設に園芸活動を導入し、活動の円滑な導入の要因について職員の意識の面から考察した。その結果、職員が利用者と一緒に園芸作業を行ったり、栽培の様子を見たりする機会を得たことで、職員自身が園芸に関心を持つようになったというよりも、むしろ職員が「園芸活動は利用者の反応が良いからまたやってほしい」と実感することが多くなり、このことが園芸活動の円滑な導入の一因になりえたのではないかと推察された。

## 謝 辞

アンケート調査、聞き取り調査および園芸活動の実施にご協力いただいた秋田県内の福祉施設等の職員ならびに利用者の皆さんに深く感謝します。

## 引用文献

- 半澤由加・岩崎 寛. 2013. 高齢者施設における園芸活動が施設職員の意識に与える影響. 人植関係学誌. 13 (別) :24-25.
- 入江智子・岡島 毅. 2012. 小学校と農業高校における園芸交流活動の現状把握と実践. 人植関係学誌. 11(2):1-7.
- 神田啓臣・中野麻衣子・保坂奈緒子・高橋春實・吉田康德・北原克宣. 2001a. 秋田県内の福祉施設等における園芸療法に対する意識調査報告書. 秋田県大短大部紀要 2号 :13-21.
- 神田啓臣・中野麻衣子・保坂奈緒子・高橋春實・吉田

- 康德・北原克宣. 2001b. 秋田県内の福祉施設等における園芸活動の実態に関する調査報告書. 秋田県大短大部紀要 2号 :23-35.
- Kanda, H., H. Takahashi, Y. Yoshida and M. Kunoh. 2008. Examination of optimum form of horticultural activities at welfare facilities in rural villages of Japan. Acta Hort. 790:231-235.
- 神田啓臣・高橋春實・吉田康德・久能幹雄・小瀧みゆき. 2009. 介護を必要としない高齢者が園芸福祉活動のスタッフを目指す活動事例. 人植関係学誌. 9 (別) :16-17.
- 増谷順子・太田喜久子. 2013. 軽度・中等度認知症高齢者に対する園芸活動プログラムの有効性の検討. 人植関係学誌. 13(1):1-7.
- 松尾英輔・藤木雄二・藤原勝紀. 1997a. 福岡県下の福祉施設, 精神病院における園芸の療法的活用に関する調査研究 (第5報) 老人福祉施設における園芸の実態 (その1). 園学雑 66 (別2) :706-707.
- 松尾英輔・藤木雄二・藤原勝紀. 1997b. 福岡県下の福祉施設, 精神病院における園芸の療法的活用に関する調査研究 (第6報) 老人福祉施設における園芸の実態 (その2). 園学雑 66 (別2) :708-709.
- 松尾英輔 (代表). 2002. 福祉施設, 医療施設等における健康法, 療法としての園芸の活用に関する調査研究. 平成11年度-13年度科学研究費補助金報告.
- 大竹正枝・古橋 卓・前田智雄・鈴木 卓・大澤勝次. 2008. 札幌市内福祉施設における園芸療法および園芸活動の今後の課題. 人植関係学誌. 7(2):31-37.
- 大竹正枝・古橋 卓・前田智雄・中野英樹・鈴木 卓・大澤勝次. 2010. 数種園芸作業が人の生理および心理に及ぼす効果の解析. 人植関係学誌. 10(1):25-30.
- 柴谷郁子・原田 章・鷺尾金弥. 2009. 庭環境の継続的整備による身体障害者療護施設の入居者と職員の植物と園芸活動に対する関心の変化. 人植関係学誌. 8(2):15-22.
- 多田 充. 2010. 都市公園における地域協働による園芸療法プログラムの運営. 人植関係学誌. 10(別):10-11.
- 若野貴司・末吉勝則・石川 治. 2011. 屋外自然空間を用いたレクリエーション療法4症例の効果. 人植関係学誌. 10(2):27-33.